

ただ『今』を生きる

珠洲市から参りました 西光寺住職 禧美と申します。

ご縁あって 寺井 称佛寺さんからお声がありまして、今日 麦口でお参りさせていただいております。

今日は、ただ『今』を生きる というテーマで少しお話をさせていただきます。

私事ですが、お酒が好きでして、

ところが、仏教では、不飲酒戒（ふおんじゅかい）という戒めがありまして、これは大変不利な戒めでして、なんとかならないかと いろいろ探しました。

ありました！

なんと、蓮如上人。

蓮如上人は、お酒すらも、大切な接待の一つとされていました。

それは、なによりもまず、ご門徒様がお寺に足を運んでくださることを喜ばれたからです。

お酒を振舞うことが、ご門徒の皆様と一緒に、仏法を喜ばせていただく一つの縁となるのであれば、それもまたお釈迦様や親鸞聖人への報謝であるという上人の思いが、ひしひしと伝わってきます。

ご門徒の方々が京都にやって来ると、蓮如上人は、寒いときには、酒などをよく温めさせて、「道中の寒さを忘れられるように」と仰せになり、また暑いときには、「酒などを冷やせ」と仰せになりました。

このように上人自ら言葉を添えて指示されたのです。

まだあります。

法然上人。

法然上人のお答えは「まことは飲むべくもなけれども、この世のならひ」。

つまり、「本当は飲むべきではないけれども、この世の暮らしののならいだから・・・」というのです。

法然上人は何よりお念仏を大事にしたお方です。

この世の慣習になっていること、日常の中でよく起こることに目くじらたてて避けようとするより、お念仏を喜ぶ生活のことを考えよとお教えくださっているのだと思います。

では、法然上人はこの世のおつきあいならお酒をどんどん飲んで良いと言っておられるのでしょうか？

それは違うでしょう。あくまでも「戒」を守ることが前提。

度を越さないように自らを制するのが仏教徒の生き方だと思います。

「而今(にこん)・・・今でしょ」

海外でもSAKEとして注目されている日本酒。

その中でも而今(じこん)という名の日本酒を知っていますか。

実は、日本酒好きなら知らない人はいないであろう、入手困難な大人気のお酒なのです。全国の酒処で置かれる人気銘柄で、ファンも多く、個人の消費者にとっては入手困難とされています。価格もプレミアムがついて一升瓶が三万円前後。

而今という名前は、永平寺を開いた道元禅師の「今、この一瞬を大切に生きる」という言葉から、「過去にも囚われず未来にも囚われず、今をただ精いっぱい生きる」という願いを込めてつけられたそうです。

鑑評会で金賞を複数回受賞しながらも、たゆまぬ努力でお酒を造り続ける蔵元の姿を表していると言えるのではないのでしょうか。

而今(にこん)言い換えると

今でしょ！

そして 浄土真宗では、「ただ今を生きる」

「ただ今を生きる」

もしかすると、とても簡単でとても難しいことかもしれません。

今年の年賀状の文面に、

ちょっといい言葉のおすそ分け

「また明日」

言葉の重みを今知った

「明日」は

あたりまえじゃないから

気仙沼高校文芸部員

2011年の東日本大震災で被災された高校生の言葉です。

福島県浪江町にある真宗大谷派・正西寺坊守さんの話。

東日本大震災から十三年の歳月が過ぎました。

「すさまじい揺れと津波、その後の原発事故によって多くの「明日」が絶たれました。

明日食べようと取っておいたお菓子、明日着ようとしていた服、明日会うはずだった友人、明日住むはずだった家。

そして多くの方々が「明日」そのものを喪ったのです。

震災から少ししたころ、大手予備校（東進ハイスクール）のCMが流れていました。

その予備校の講師が最後に言うセリフが、「じゃあいつやるか？ 今でしょう！」。

事故の後、ようやく再会できた友大たちとこのCMが話題になりました。

「いつか使おうと大切にとっておいた食器が粉々になった」

「地震でダンスから飛び出した洋服やぬいぐるみが放射能で汚染されて、もうダメになった」

「いつでも行けると思っていた場所が、警戒区域で入れなくなった」

そして皆口々に「いつかなんて言ってちゃだめだよ。『今でしょ!』なんだよね」と。

「明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」という親鸞聖人の言葉を、私たちは震災と原発事故という形で身をもって知らされました。」とおっしゃっておいでいます。

身をもって体験しました。

◎ 1月1日の能登半島地震。

相田みつをさんの詩に「そのうち そのうち 弁解しながら 日がくれる」とありますが、相田みつをさんは、「あなたは今を生きていますか。今を忘れて生きていてのではないですか。」と問いかけていらっしゃるのではないのでしょうか。

今私は、72歳です。

同級生に、事あるごとに、「そろそろ寺参りせんか。今度、お寺でお参りあるし、たまにこんか」と呼びかけています。

すると、「そのうちお参りするから……」、「そのうち聞かせてもらうから……」と、「そのうち、そのうち……」と、よく言うがですね。

「そのうち、そのうち……」というのは、結局その気がないということだと思います。

例えば、「今度、新小松イオンで一日だけ全品半額セールがあるげと」と言われて、「あそう、そのうち、そのうち」と言うのでしょうか。

そうは言わないでしょう。

「え！本当。何日？」と、まず日を聞くと思います。

それと同じことで、もしお寺にお参りする気があるのなら、「お寺で報恩講があります。お参りしてください」と、こう言われたら「いつですか？」と、まず日を聞くとします。

ところが中には、お寺にお参りがあると用事が出来るという人がいます。

「その日は忙しいからお参りできません。またこの次参ります。」

しかし、年に一度の温泉旅行に行きませんかといわれると、なんと用事のある人が用事がなくなります。

「あっ、その日はちょうど空いています」

どうも仏法というものは暇ができたらか、そのうちに聞けばよいと思っているようです。

このように、私たちは何かにつけて「そのうち、そのうち……」ということをよく言います。

あのとんちで有名な一休さんの晩年のお話だそうです。

ある日、一休さんが弟子の小僧さんを連れて町を歩いていた時のこと、ウナギ屋さんのお店の前を通りかかると、いい匂いがあたり一面立ち込めていたそうです。その時、師匠の一休さんが「うまそうやなあ、食べたいなあ……」とつぶやきながら、生唾を飲み込むような仕草をしていたそうです。

その様子を見た小僧さんは、「師匠はウナギを買って来いと暗に言われているのかな？」と思い、買ってきた方がいいのかどうか、どうしようかとずっと思索しながら師匠の後をついて歩いていったのです。

用事を済ませ、お寺に帰ってからも、頭の中はウナギのことが気にかかって仕方ありませんでした。そこで思い切って師匠に昼間のウナギ屋の前を通ったときのことを話し、「今からでも買ってきてみましょうか」と聞きました。

一休さんは「お前はまだそんなところでとどまっているのか！お前の心はウナギ屋さんの前に止まったままだ。わしは確かにウナギをうまそうや、食べたいなあといったが、そのあと花屋さんの前では、花の綺麗さに目をうばわれていたし、他のことでも色々心を動かされたことがたくさんあった。お前にはそんなことは何も見えていなかったということだ」と、諭されたということです。

このお話は、心が何かにとらわれてしまうと周りが見えなくなることを表わしていると思います。

考えてみれば、私たちの身体はいつもこの現在只今を生きているのでしょう。

しかし、私たちの思いはどうでしょうか。

今を離れて、昨日あったことを悔やんだり、明日のことを思いわずらったりしているのではないのでしょうか。

私たちのあり方は、思いの中で、いつも過去を懐かしんだり悔やんだり、また、未だ来ぬ未来を夢見ながら、あるいは明日の準備に追われて、現在只今に立っていないのです。

つまり、浮草のような生き方です。

宗祖親鸞聖人は、そのご生涯を通して最も戒められたのは「空過」ということでした。

「空過」とは、かけがえのない一日一日を無駄に過ごしてしまう生き方です。

「そのうち、そのうち……」という生き方（明日があるさ）は、そして浮き草のような生き方は、まさしく「空過の人生」です。

『空過』を辞書で引いてみると「むなしく時を過ごすこと」と書いてあります。

仏教は『自覚の宗教』と言われます。

仏や教えと向き合うことは、それらを鏡としてそこに映し出された自分の姿と向き合うことだからです。

自分の勝手な考え・思い込み・都合に、結局は振り回され、煩わされてはいないか。

自己を省み、自分の在り方に目覚めて行くことが、人生を『空過』させないことではないのでしょうか。

その「空過」の反対を「勝過」と言います。

「勝過」とは、与えられた一日一日を精一杯生きるという生き方です。

「勝過の人生」と「空過の人生」、その違いは一つしかありません。

それは「今日のことを今日する」か「今日のことを明日に延ばすか」、ただそれだけのことです。

その一日一日の積み重ねが、やがて勝過と空過の人生に大きく分かれてしまうのです。

仏さまの教えを聞かせていただくということは、「今」を見つめることです。

再び戻らぬこの一日を、このひと時を、大切に生きていきたいものです。

今日のまとめです。

阿弥陀さまの「必ずあなたを救いとる」という願いは「いつでも、どこでも、誰にでも」届いています。

と言うことは『今、ここで』私ひとりの苦悩の上に常にはたらいてくださっているのです。

私自身の姿を思う時 三つの見え方があると思います。

一つには、「私しか知らない私」

私は心の中で どれだけの欲や腹立ちの心を持ち、人を妬んだり羨んだり差別していることか。

しかし それを他人に知られるわけにはいかないで隠しながら、自分でも気づかないフリをしながら 日々を過ごしているのでしょう。

次に、「私の知らない私」。

自分の事は自分が一番よくわかっているつもりですが、自分では気づけない嫌なところもたくさんあると思います。

きっと周りの人は知っているのだけど、知らないふりをしてきているのかも知れません。

そしてもう一つが「仏さまに見抜かれた私」。

阿弥陀さまは「あなたの欲の心も、怒りも愚かさも知っているよ」とおっしゃるのです。

それだけでなく「あなたの悲しみも知っているよ、苦しいね、辛いね、寂しいね」と私とともに、いや私に先んじて悲しんでくださる仏さまなのです。

阿弥陀さまは私がいかに隠そうとも すべてをご存知、つまり私の正体がバレてしまっているのです。隠し事をしていると、もしバレたらどうしようかと心配になりますが、バレたらもう隠さなくて良いのですから安心です。

本当の安心が そこにあります。

親鸞聖人は、ご自身の事を「愚禿」と名乗られ、自身の内面にある悩みや問題を誤魔化すことなく見つめられました。

そして、仏さまの「われにまかせよ そのまま救う」のお声を聞き、わが身を顧みながら感謝の日暮らしをされました。

どのような私であっても、いつどんな時であっても、片時も離れることなく、この私の全てを包み込んでくださるのが阿弥陀という仏さまです。

今の私にどれほどの苦悩があろうとも、そのままに包み込んでくださる阿弥陀さまがご一緒です。

だからこそ、阿弥陀さまのおはたらきをよくよく聞かせていただくことを大切にしたいものです。

「ただ今を生きる」

とても簡単でとても難しいことですが、ご一緒に「今」を見つめる時間を少しでも増やしてみませんか。

安心して、ともに歩ませていただきましょう。